

集団・思考停止・想像力・正義

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

AとはAumのA, AsaharaのA, ArakiのA, AnswerのA, AgonyのA…。帯封には「僕らはあの事件からまだ何も学べていない」とある。あの事件とは地下鉄サリン事件、あるいは一連のオウム真理教関連の事件のことだ。

本書は、オウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画「A」の製作過程で生じた出来事と、その出来事に対する著者自身の思いが綴られたものである。記憶はあいまいで、日常生活の中に埋没していると、自分に直接関係のないことはどんどん忘却のかなたへ遠ざかっていく。しかし、麻原護送のテレビ映像に「まるで遠い世界で起きた違う時代のできごとを眺めているように」現実感がなかったのは、私も同じだ。著者は、「青山総本部の中で接した彼らの日常に、危険で凶悪という雰囲気は僕はどうしても嗅ぎ取ることができなかった。（中略）愚鈍なくらいに善良に見えるこの集団と、凶悪な無差別殺人との接点は、やはり感覚的にどうしてもわからない」というところにこだわり続け、「現役の信者たちの現在を、とにかく既成の形容詞や過剰な演出を排除して、ドキュメンタリーとしてとらえたい」と申し込む。そして彼の真摯な申し出は受け入れられ、撮影が始まる。

撮影は決して順調だったわけではない。テレビ局と話をつけていたにもかかわらず、TBS問題の発覚によって放映は難しいということになる。フリーのディレクターである著者の経済的問題もある。オウムと世間とのトラブルに必然的に巻き込まれてしまう場合もある。何より

彼自身の問題。「宗教の内側と外側では言語が違う。（中略）『単なる言い逃れ』や『見苦しい言い訳』などの、マスコミが好んで使う修辭ではかたづかない、もっと絶望的で本質的な乖離』を感じる彼は翻訳者になれない苦悩の中であがき続ける。そして2年以上オウムと接してきて、彼はいう。「結論だ。オウムはわからない。『信じる』行為を『信じない』人間に解析などできない」と。

完成した映像はベルリン国際映画祭に招待され上映される。上映後のディスカッションで、これは本当にドキュメンタリーなのかと問われ、著者は「『ほとんどの日本人に共通するメンタリティがあります。共同体に帰属することで、思考や他者に対しての想像力を停止してしまうことです。（中略）ドイツ人にはそんなメンタリティはないと本当に言いきれるのでしょいか』」と応じ、観客がいう。「『ドイツ人も日本人も、きっと他の国の人だって人間は皆同じ。同じだから過去にも戦争は起きたし、そしてこれからも起きるのよ』」と。

同時多発テロへの報復としてアメリカはアフガニスタンを爆撃する。ひどいことをした集団の成員なのだから何をされてもいいのだとオウムの信者たちはいわれる。だが、あちら側からみたら、こちら側の私たちこそひどい人々の集団かもしれないのだ。オウムの視点でみれば、社会一般こそが洗脳集団に見えるに違いない。私は共同体に帰属しつつ、個であり続けること、個として思考し続けることの大切さをこの書から学んだと思う。



さかた・みよし

2001年の4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、ついつい、ZZZZ…。寝室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374